

平成23年度ウルメイワシ太平洋系群の資源評価

責任担当水研：中央水産研究所（阪地英男、梨田一也）

参画機関：三重県水産研究所、和歌山県農林水産総合技術センター水産試験場、徳島県立農林水産総合技術支援センター水産研究所、高知県水産試験場、愛媛県農林水産研究センター水産研究センター、愛媛県農林水産研究センター水産研究センター栽培資源研究所、大分県農林水産研究指導センター水産研究部、宮崎県水産試験場

要 約

産卵量調査結果に基づき、本資源の水準は中位で、動向は減少と判断した。産卵量は、2004～2007年産卵期（前年9月～8月）の間増加して138兆粒に達したが、2008年においては2007年の50%の69兆粒に減少したが、2009年にはやや増加して87兆粒、2010年には84兆粒となった。2011年には前年並みの86兆粒となる見込みである。漁獲量は2004～2007年の間増加して3万2千トンに達したが、2008年は2万トンに減少した。2009年では2万9千トンと再び増加したが、2010年では1万8千トンに減少した。2011年上半期の漁獲状況から、2011年全体として2010年より増加することが予想される。水準・動向が中位・減少にある本資源の管理目標としては、現状の漁獲量を減少させ資源の維持を図ることと考え、ABC算定にあたっては「平成23年度ABC算定のための基本規則」の2-1)を用い、ABClimitは現状（2008～2010年の平均）の漁獲量×係数0.79とした。この係数は、資源量の指標値である産卵量の最近5年間の回帰式から求めた変化率とした。ABCtargetは、ABClimit×安全率0.8（標準値）とした。

2012 年 ABC		資源管理基準	F 値	漁獲割合
ABClimit	17 千トン	0.79 Cave3-yr	—	—
ABCtarget	14 千トン	0.8・0.79 Cave3-yr	—	—

千トン未満を四捨五入。

年	資源量 (千トン)	漁獲量 (千トン)	F 値	漁獲割合
2009	—	29	—	—
2010	—	18	—	—
2011	—	—	—	—

水準：中位 動向：減少

本件資源評価に使用したデータセットは以下の通り

データセット	基礎情報、関係調査等
漁獲量	漁業・養殖業生産統計年報（農林水産省） 主要港水揚げ量（宮崎～三重の7県） 体長組成調査（宮崎～三重の7県）
資源量指数 ・産卵量	卵稚仔調査（水研セ、鹿児島～青森の18都県） ・ノルパックネット定線調査（日向灘～潮岬沖）

1. まえがき

1992年以降、宮崎県～三重県の漁獲量は1万～3万トン台で推移しており、マイワシ、カタクチイワシに比較して資源水準、漁獲量とも安定している。成長、1尾当たりの産卵数などの生物特性に未説明の点が多い。

2. 生態

(1) 分布・回遊（図1）

回遊範囲はマイワシ、カタクチイワシよりも狭い。卵と成魚の分布域はほぼ一致し、土佐湾とその周辺海域は産卵量が多いので主分布域と考えられる。

(2) 年齢・成長

寿命は2歳前後（真田ほか 1994、1996、図2）。月別の体長別漁獲尾数を見ると、春季に0歳魚が出現し、前年生まれの1歳魚とともに分布する。夏季に1歳魚はほぼ姿を消し、冬季まで単一年級群となる（図3）。

(3) 成熟・産卵

9か月で一部、12か月で全て成熟する（図4）。産卵期は10～7月で、盛期は2～7月と11～12月の年が多い。産卵場は沿岸域で特に土佐湾が多い（図5）。シラスの出現盛期は11～6月。

(4) 被捕食関係

動物プランクトン等を捕食する。中大型浮魚等に捕食される。

3. 漁業の状況

(1) 漁業の概要

主に旋網、定置網により漁獲される。和歌山県では棒受網でも、また、高知県では多釣りでも漁獲する。シラス（稚魚）期は船曳網で漁獲される。外国船による漁獲はない。

(2) 漁獲量の推移

宮崎県～三重県の合計の漁獲量は1992年までは5～6千トンであったが、1992年から増加し始めて1993～1996年では1万9千トン前後、1997・1998年には2万5千トン前後となった。1999～2004年では1万～1万4千トンに減少したが、2005・2006年はそれぞれ1万7千トンおよび2万2千トンに増加し、2007年は3万2千トンと過去最高となった（図6、表1）。2008年につ

いては、漁業・養殖業生産統計では2万8千トンであったのに対し、各県機関集計による主要港水揚量では1万6千トンであり、両者の間には1万2千トン以上の差があった。このため、後述の主要港水揚げ量と系群全体の漁獲量の関係（2008年を除く2000～2009年）を用いて、2008年の漁獲量を2万トンと推定した。2009年には2万9千トンと再び増加したが、2010年には再び減少して1万8千トンとなった。

ウルメイワシ太平洋系群の主要港水揚量において、年の前半（1-6月）と後半（7-12月）の間に相関（2000～2010年、 $p=0.01$ ）が認められる（図7左）。また、主要港水揚げ量と系群全体の漁獲量の間にも強い相関（2008年を除く2000～2010年、 $p=0.001$ ）がある（図7右）。2011年1-6月における主要港水揚量は7千トンであったことから年全体では2万1千トン、これから系群全体の2011年漁獲量は2万7千トンと予想され、2010年より大幅に増加することが見込まれる。

以上のように、最近5年間のウルメイワシ太平洋系群の漁獲量は、3万2千トンから1万8千トンの間の増減を繰り返している。

4. 資源の状態

(1) 資源評価の方法

産卵量および漁獲量の推移により資源の水準と動向を検討した。産卵量として、各県水産試験研究機関と水産研究所による改良型ノルパックネットの鉛直曳採集結果に基づき、中央水産研究所がとりまとめた月毎の産卵量のデータ（中央水産研究所 2011）を用いた。なお、1尾当たりの産卵量や産卵回数などの知見がないため、親魚量は不明である。ウルメイワシの産卵期は10月頃始まり翌年の7月頃まで続くことから（中央水産研究所 2011）、各年級に対する産卵量として前年9月～当年8月の集計値を用いた（2010年級に対する産卵期は2009年9月～2010年8月）。主産卵海域である土佐湾を含む日向灘～潮岬沖における産卵量の経年変動を図8に示した。漁獲量として漁業・養殖業生産統計を用いたが、前述の理由から2008年については主要港水揚げ量から推定して2万トンとした。

(2) 資源量指標値の推移

2004年産卵期から2007年産卵期まで産卵量の増加傾向が続き、2007年産卵期にはピークの138兆粒となった。2008年産卵期には69兆粒に減少したが、2009年産卵期にはやや増加して87兆粒に、2010年産卵期には84兆粒となった。2011年産卵期では、9～6月の産卵量と7～8月の産卵量の関係から、86兆粒であると見込まれた。2007～2011年の産卵量の回帰直線（ $y = -8.8383x + 119.31$, x は2006年を0とする年数、 y は産卵量）によると、最近5年間産卵量は減少傾向を示している（図8、表2）。

2007年と2009年の漁獲量は3万トン前後の高い水準にあったが、2008年と2010年にはそれぞれ前年より大きく減少して2万トン以下となった。2011年1～6月の漁獲状況から、2011年漁獲量は2010年より大きく増加することが予想される。

(3) 資源の水準・動向

2011年度の産卵量は75兆粒と予想され、1978年以降の産卵量の水準を高位・中位・低位に三分割すると2011年度は中位にあり、最近5年間の産卵量は減少傾向にあると判断された。

一方、2010年の漁獲量は1万8千トンと2009年から大きく減少したものの、2011年にはこれより増加することが見込まれる。1984年以降の漁獲量の水準を高位・中位・低位に三分割すると、2010年は中位であるが、2011年は高位になると予想される。しかし、最近5年間の漁獲量は各年で大きな増減を繰り返しており、この傾向が今後も続くとする2012年の漁獲量は2011年より少ないこともありうる。産卵量と漁獲量の水準は一致しないが、漁獲以外の情報である産卵量を優先し、資源水準を「中位」とした。また、産卵量と漁獲量の最近5年間の動向から資源動向を「減少」と判断した。

5. 資源管理の方策

水準・動向が中位・減少にある本資源の管理目標としては、現状の漁獲量を減少させ、資源の維持を図るべきであると考えた。

6. 2012年ABCの算定

(1) 資源評価のまとめ

産卵量および漁獲量の推移から、本資源の水準は中位で、動向は減少と判断した。

(2) ABCの算定

ABClimitの算定には「平成23年度ABC算定のための基本規則」の2-1)を用い、直近3年間の平均漁獲量(2万2千トン)に係数(資源量の指標値である産卵量の変化率)を乗じた。2010年資源評価では直近年(2009年)漁獲量を用いたが、最近の漁獲量は変動が大きいため、2011年資源評価では直近3年間の平均値を用いた。最近5年間の産卵量の推移の回帰式($y = -8.8383x + 119.31$)から外挿して求めた変化率は、2010～2011年では0.89、2011～2012年では0.88、2年間ではこれらの積から0.79となった(表2)。ABCtargetは、ABClimit×安全率0.8(標準値)とした。

2012年ABC		資源管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	17千トン	0.79 Cave3-yr	—	—
ABCtarget	14千トン	0.8・0.79 Cave3-yr	—	—

千トン未満を四捨五入。

(3) ABCの再評価

昨年度評価以降追加されたデータセット	修正・更新された数値
2009年漁獲量確定値	2009年漁獲量の確定
2010年漁獲量概数	2010年漁獲量
2010年主要港水揚げ量	2010年主要港水揚げ量の確定
2011年主要港水揚げ量	2011年1～6月主要港水揚げ量
2010年度産卵量	2010年7・8月産卵量
2011年度産卵量	2010年9月～2011年8月の産卵量 (7～8月は予想値)

評価対象年 (当初・再評価)	管理基準	ABClimit (千トン)	ABCtarget (千トン)	漁獲量 (千トン)
2010年 (当初)	1.0Cave3-yr	25	20	
2010年 (2010年再評価)	1.0Cave3-yr	24	20	
2010年 (2011年再評価)	1.0Cave3-yr	25	20	18
2011年 (当初)	0.82C2009	24	19	
2011年 (2011年再評価)	0.82C2009	24	19	

7. ABC以外の管理方策の提言

主産卵場である土佐湾では、釣りによる漁獲が大半であるためその漁獲圧は低く、漁獲量の変動もまき網中心の他の海域に比べて安定している。このような産卵場を維持していくことが重要であると考えられる。

8. 引用文献

真田康広・藤田正夫・石田実(1994)太平洋南部におけるウルメイワシの耳石日周輪に基づく年齢と成長. 南西外海の資源・海洋研究(10), 55.

真田康広・藤田正夫・石田実(1996)太平洋南部におけるウルメイワシの耳石日周輪に基づく年齢と成長. 平成2～4年度地域性浮魚資源管理方式開発調査報告書, 南西海区水産研究所・三重県水産技術センター・和歌山県水産試験場・徳島県水産試験場・高知県水産試験場・愛媛県水産試験場・大分県水産試験場・宮崎県水産試験場・鹿児島県水産試験場, 54-58.

中央水産研究所 (2011 印刷中) 平成23年度中央ブロック卵・稚仔プランクトン担当者協議会研究報告(31).



図1. ウルメイワシ太平洋系群の分布

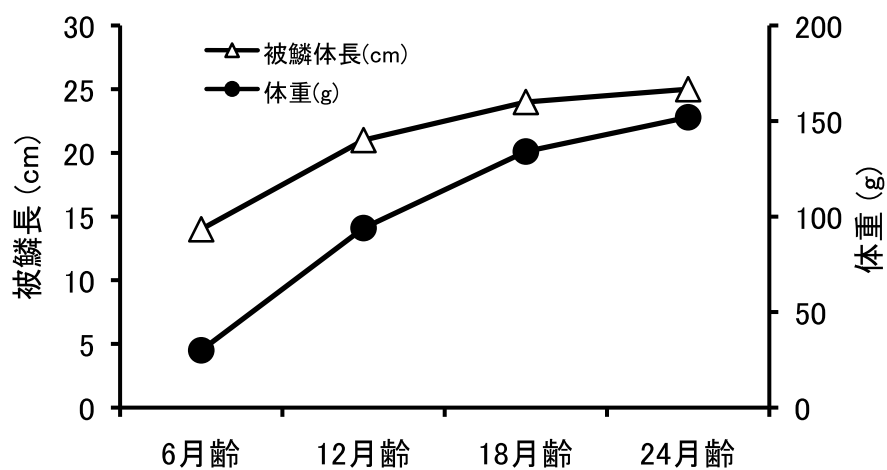


図2. ウルメイワシ太平洋系群の成長

ウルメイワシ太平洋系群-7-

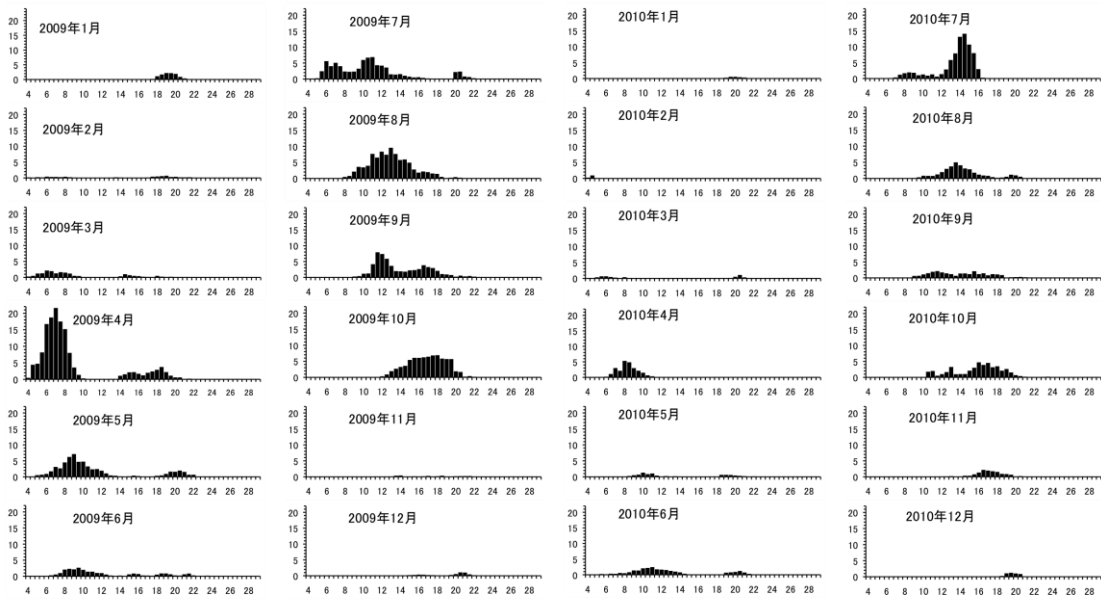


図3. 2009年1月～2010年12月におけるウルメイワシ太平洋系群の体長別推定漁獲尾数組成の推移（横軸：体長cm、縦軸：漁獲尾数 百万尾）

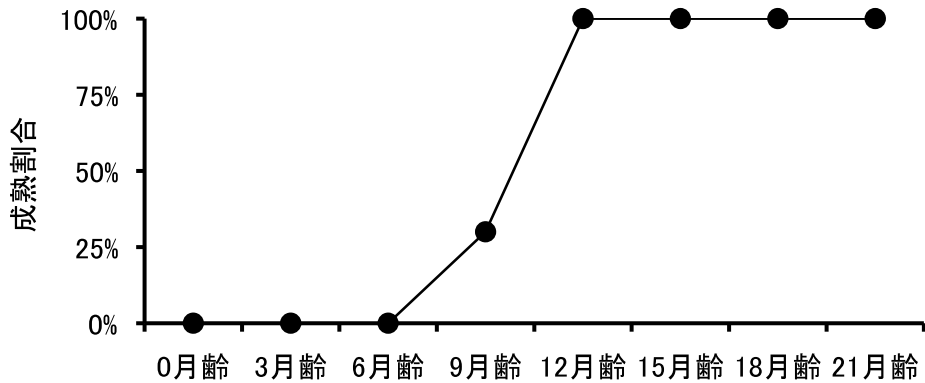


図4. ウルメイワシ太平洋系群の月齢別成熟割合

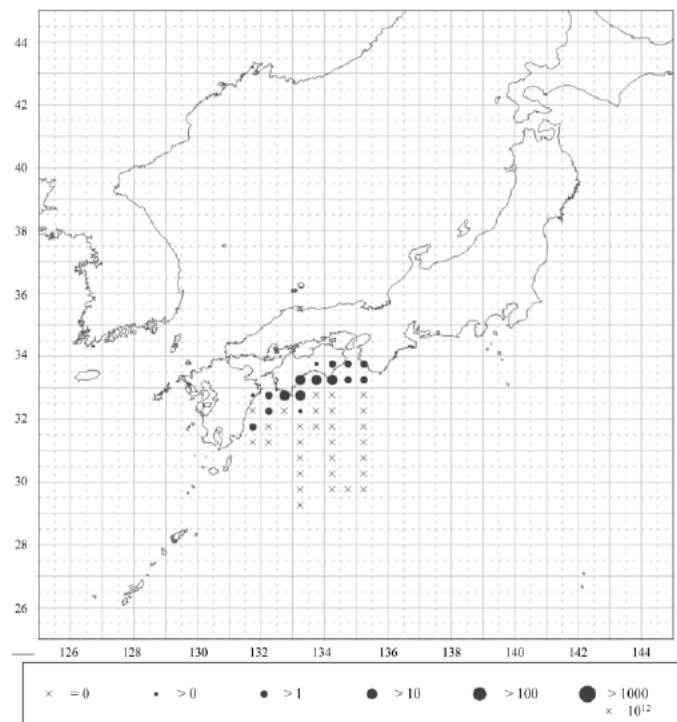


図5. 2010年産卵期におけるウルメイワシ太平洋系群の産卵量（Ⅲ区≡日向灘～潮岬）

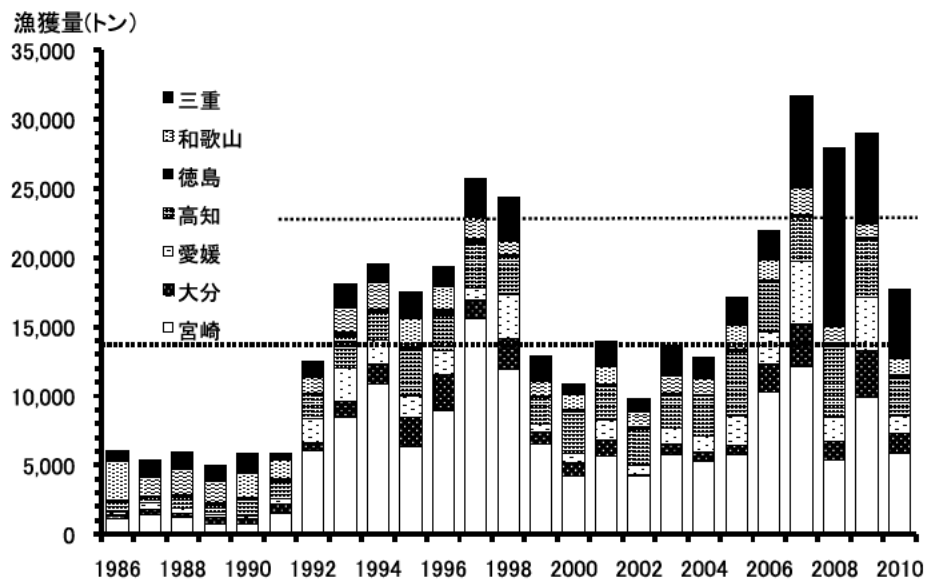


図6. ウルメイワシ太平洋系群の県別漁獲量（漁業・養殖業生産統計） 2010年は概数。2008年は2万8千トンであるが、主要港水揚げ量から推定した2万トンを道いた。点線は最低値と最高値の間を三分割した線

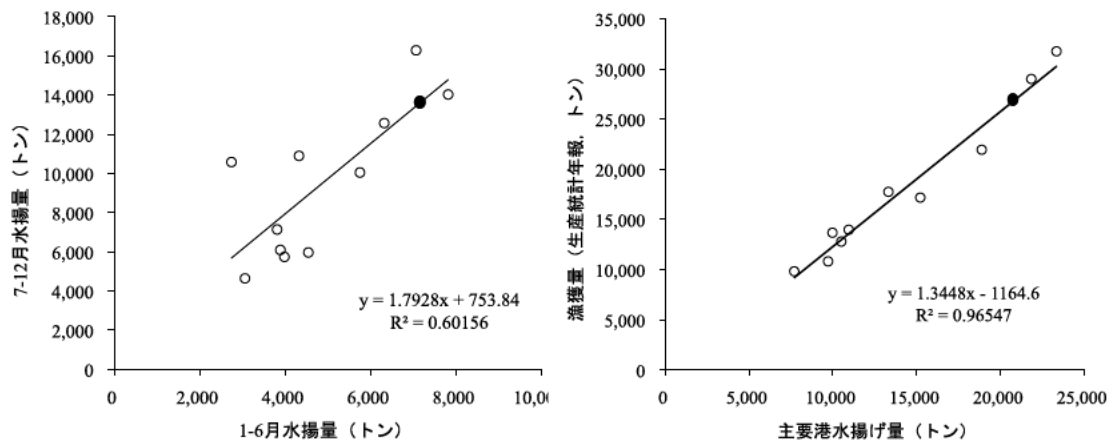


図7. 2000～2010年における宮崎県～三重県の主要港における水揚量の前半（1-6月）と後半（7-12月）の関係（左、●は2011年の前半の値とそれから予想した後半の値）および主要港水揚げ量と年間漁獲量の関係（右、●は2011年の予想水揚げ量とそれから予想した漁獲量、特異年であった2008年を除く）

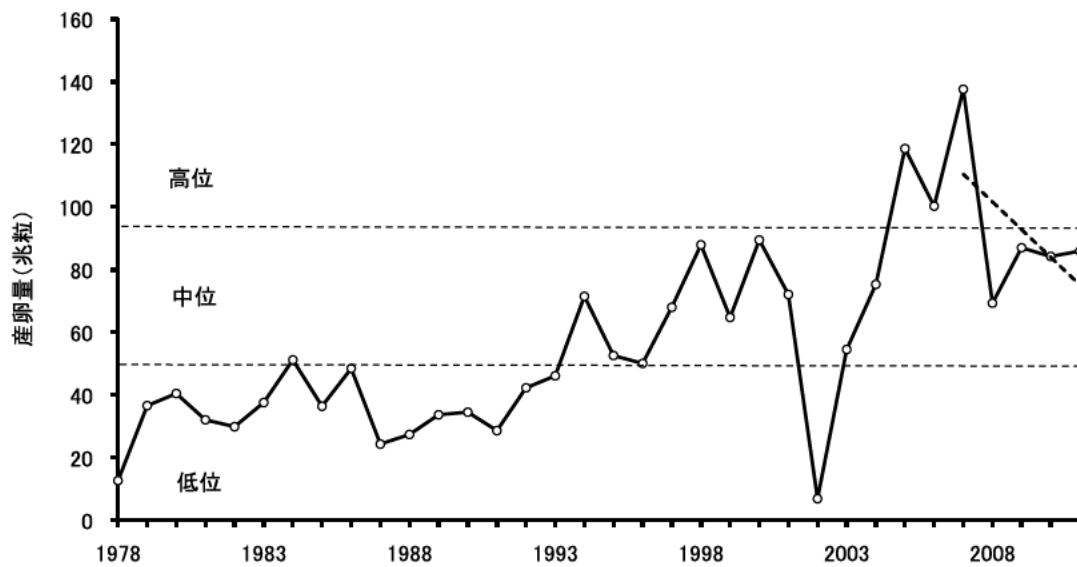


図8. ウルメイワシ太平洋系群の産卵量（前年9月～当年8月まで）の経年変動（2011年は予想値） 破線は2007年から2011年までの産卵量の回帰直線、点線は最大値と最小値の間を三分割した線

表1. 宮崎～三重県における漁獲量（漁業・養殖業生産統計）

	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999
宮崎	876	1,133	1,464	1,181	737	693	1,479	6,050	8,421	10,852	6,314	8,960	15,572	11,918	6,512
大分	1,130	293	359	286	471	401	657	586	1,171	1,447	2,182	2,596	1,360	2,214	900
愛媛	171	222	434	460	196	255	419	1,732	2,393	1,726	1,533	1,725	929	3,188	593
高知	677	709	488	877	788	1,189	1,312	1,723	2,357	1,998	3,259	2,485	3,137	2,697	1,925
徳島	120	125	50	22	66	111	153	116	309	213	252	514	378	186	75
和歌山	2,199	2,834	1,332	1,877	1,527	1,785	1,320	1,099	1,733	1,922	2,061	1,607	1,533	977	1,015
三重	1,092	690	1,225	1,225	1,215	1,403	468	1,245	1,770	1,435	1,920	1,463	2,809	3,185	1,902
合計	6,265	6,006	5,352	5,928	5,000	5,837	5,808	12,551	18,154	19,593	17,521	19,350	25,718	24,365	12,922

	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010
宮崎	4,251	5,650	4,244	5,792	5,306	5,743	10,250	12,079	5,351	9,865	5,834
大分	878	1,186	95	770	615	711	2,104	3,168	1,394	3,406	1,489
愛媛	751	1,384	678	1,152	1,151	2,082	2,239	4,506	1,694	3,836	1,279
高知	3,063	2,576	2,683	2,355	2,982	4,605	3,627	3,227	5,329	4,276	2,882
徳島	60	66	55	81	74	267	147	133	100	90	36
和歌山	1,056	1,281	1,080	1,320	1,114	1,661	1,472	1,922	1,143	1,007	1,172
三重	758	1,827	992	2,202	1,547	2,104	2,099	6,710	12,951	6,564	5,052
合計	10,817	13,970	9,827	13,672	12,789	17,173	21,938	31,745	27,962	29,044	17,744
主要港水揚量	9,722	10,953	7,703	9,983	10,511	15,224	18,891	23,354	15,802	20,712	13,324

表2. ウルメイワシ太平洋系群における産卵量（(Ⅲ区≡日向灘～潮岬)、前年9月～当年8月まで、兆粒、2011年は推定値）および2007年から2011年の産卵量の回帰式($y=-8.8383x+119.31$)から求められた2007年から2012年までの産卵量とそれらの1年間の減少率

年	1978	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995
産卵量（兆粒）	13	37	40	32	30	38	51	36	48	24	27	34	35	29	42	46	71	53

年	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012
産卵量（兆粒）	50	68	88	65	89	72	7	55	75	119	100	138	69	87	84	86	
回帰式における 産卵量（兆粒）													110	102	93	84	66
1年間の減少率													0.92	0.91	0.90	0.89	0.88